

マルコによる福音書5章25節～34節。「さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。『この方の服にでも触れればいやしていただける』と思ったからである。すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体を感じた。イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、『わたしの服に触れたのはだれか』と言われた。そこで、弟子たちは言った。『群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、《だれがわたしに触れたのか》とおっしゃるのですか。』しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた。女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話した。イエスは言われた。『娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい。』」

会堂長ヤイロの娘が死ぬような病になった。動転したヤイロは日頃から教えを受けていたファリサイ派の人々が敵対していた主イエスに娘のいやしを、額を地面にこすりつけ、哀れを誘うような姿で懇願した。懇願が受け入れられ、自宅に向かった。民衆は、事の成り行きを見届けたいと、興味津々として、押し合いへし合いしながらついて行った。

その人ごみの中に、一人の女が割り込んできた。彼女は12年間も出血が止まらず、多くの医者にかかって苦しめられ、財産も使い果たしたが、ますます悪くなっていた。出血が続き健康を著しく損ねていた。経済的にも行き詰っていた。結婚もできず、家庭を持ってない。その上、出血は律法で「汚れ」と見なされ、他の人との関係をきびしく拒まれていた。婦人病であるから、恥ずかしくて口外できない。あらゆる面で、出口がなく、閉じこもっていた彼女は、主イエスが来られていると聞いた。意を決して、もみ合う人ごみの中に紛れ込み、後ろから主イエスに迫った。他の病気なら、言葉でいやしを求めることができる。口に出せない彼女は、服に触れればいやされると信じて、針先のような鋭い願いを指先に込めて、主イエスの服に触れた。すると、出血は止まって、彼女はいやされたことを体を感じた。主イエスは、ご自分の体から力が出ていったことに気づいて、振り返り「わたしの服に触れたのはだれか」と言われた。弟子たちは、群衆が服に触れるほど押し迫っているのだから、誰であるか特定することはできませんと答えた。しかし、主イエスは服への触れ方の違いを知って、辺りを見回した。

教会には多くの人々が見える。その一人一人の求道の心を、主イエスは知っておられるということであろうか。恐れた彼女は震えながら進み出て、自分の身に起こった全てを人前で告白した。主イエスは「娘よ、あなたの信仰があなたを救った」と言われた。パウロはガラテヤ書2章16節で「イエス・キリストへの信仰によって義とされる」と書いているが、正しくは「キリストの真実（十字架と復活）によって義とされる」である。救いは、信仰の持ち方の良し悪しではなく、キリストから来る。救いは恩寵である。ところが、主イエスは彼女に「あなたの信仰があなたを救った」と言ってくださった。どんなに嬉しかったのだろうか。このような言葉をかけていただきたいと、主イエスへの思いが募る。